

NP再考6 体験学習サイクルと問題解決のための4つのステップ

文責 三沢直子

フォローアップ講座で「体験学習サイクルと問題解決アプローチはどう違うのですか？」という問いをしばしば受けます。答えは「基本的には同じものです。体験学習サイクルを問題解決に用いたものが、問題解決アプローチであり、問題解決のための4つのステップです」ということになります。

例えば、親用のテキストの77Pに書かれている「問題解決のための4つのステップ」と体験学習サイクルを照合するならば、「1. どうしたのか」は体験学習サイクルの<認識>、「2. なぜそうするのか」は<関連付け>、「3. どうしたらいいのか」は<応用>に当たります。そしてそれを実際に<体験>してみて、「4. それでもうまくいかないときは」、また認識→関連付け→応用に戻る、ということになります。

以上のように、体験学習サイクルは①個人の問題解決のために使う、というのが主な目的になりますが、その以外にも②グループで困難な場面が生じた際の解決法として使う（55～57P）や、③セッション全体の構成に使う（148～158P）などがあります。

②の困難な場面の解決法として使うのは、ファシリテーターの役割は解決策を提示するのではないので、皆で「今、グループ内でどのような問題が起きているのか（認識）」、「それは何故起きているのか（関連付け）」、「解決のためにどのようにしたらよいか、それを今後の生活にどのように生かせるか（応用）」と、体験学習サイクルに沿って考えることによって、メンバー自身が問題解決を図るのを援助する、ということがあります。

また、③のセッション全体の構成に使うというのは、毎回行われるセッションや個々のアクティビティは、何かを学ぶための手段なので、常にファシリテーターは「認識→関連付け→応用」を念頭に置きながらセッション計画を考え、最後の振り返りの時間には、「どんなことを学んだか？（認識）」、「自分にとってどんな点がよかったか？（関連付け）」、「今後、実際に使えそうなものはあったか？（応用）」を確認する、ということがあります。

②、③はファシリテーターが心がけるべきものですので、親用テキストには77Pに「問題解決のための4つのステップ」としてしか出ておらず、しかも「しつけ」のところを出ているので、関連付けの質問は、「(子どもは)なぜそうするのか」という言葉になっています。しかし、親自身の問題解決にこの4つのステップを使う場合は、「なぜそうするのか」という設問は責められていると感じる親も多いので、関連付けについての質問は26～27Pなどを参照しながら柔軟に考えるようにしましょう。

なお、研修でお配りした4つのステップのシートを使うのは必須ではありませんが、最近、初心者の方々はプログラムの前半で使用している方々が多いようです。改定した4つのステップシートが、HPのファシリテーター専用ページからダウンロードできるようになりましたので、必要な方はお使いください。また、以上の説明でも釈然としない方は、フォローアップ講座や無料電話相談（毎月一回実施、日時はHPをご覧ください）をご利用ください。